

平家物語「大原御幸」と臨終行儀

――西から東へ向く三尺阿弥陀――

阪口拓也

〔抄録〕

『平家物語』には灌頂巻なる巻が存在し、その中に「大原御幸」という章段がある。ここでは出家した建礼門院の庵室の中に臨終行儀の影響が見える。庵室の中に安置された阿弥陀像の「方角」に注目し、鎌倉時代の臨終行儀における阿弥陀像の安置された方

角について考察する。すると覚一本の阿弥陀像の安置された「西向き」という方角には、浄土宗の西山派の影響が見えるのである。

キーワード 平家物語、灌頂巻、臨終行儀、証空、見返り阿弥陀

はじめに

『平家物語』灌頂巻に「大原御幸」という章段がある。これは建礼門院を主人公とした別巻であり、建礼門院が出家し、往生するまでを五つの章段にまとめたものである。そのなかの後白河法皇が建礼門院を訪ねる「大原御幸」では、建礼門院が住む庵室の中の描写があり、それは明らかに臨終行儀との関係が伺える。本稿では「大原御幸」における臨終行儀を鎌倉時代の実際受容の点から見ていこうとするものである。そして、鎌倉時代の設像について見ていくとそこには浄土宗西山派の影響が考えられる。

一章 『平家物語』諸本における庵室の描写

一節 読み本系統

『平家物語』には様々な諸本が存することが知られる。その諸本は「読み本系統」と「語り本系統」に大きく大別することができる。ここでまず「読み本系統」の中から最古態であるとされる「延慶本」、こちらも古態であるとされる真名本の「四部合戦状本」、二十巻本である「長門本」、四十八巻という『平家物語』では最大の巻数を持つ「源平盛衰記」の四本を取り上げ、見ていく。尚、傍線は筆者が便宜上付したものである。

「大原御幸」では後白河法皇が出家した建礼門院を大原まで訪ねる。そこでは後白河法皇が建礼門院の庵室を覗く場面がある。延慶本では、

サテ、内ノ有様ヲ御覧ズレバ、一間ヲバ仏所ニシツラヒテ、三尺ノ立像ノ御身ハ、泥仏来迎之三尊、東向ニ奉安置、奉備ニ花香。仏前ニハ浄土ノ三部経ヲ置セ給ヘリ。『観無量寿経』ヲハ半巻計ハ、アソバシ残タリト見ユ。仏ノ左方ニハ普賢ノ絵像ヲ奉レテ懸、御前ナル紫檀ノ机ニハ八軸之妙文、并廿八品ノ惣釈ヲ置セ給ヘリ。右ノ方ニハ善導ノ御影ヲ懸テ、九帖ノ御書、並ニ、『往生要集』已下ノ諸経ノ要文、被レ立タリ。

とする。⁽¹⁾ 庵室の中には来迎の三尊が東向きに安置されているとある。像について来迎三尊とあるところからこれは阿弥陀、勢至、観音の三尊である。次に四部合戦状本では、

法皇見廻、御庵室一間覚御寢所敷馴、畳上引返御敷皮被置復覚夜御衾被懸紙御絹是御覧御涙又進、一間覚持仏堂三尺立像本尊御身御在泥仏来迎弥陀三尊奉下立東向仏前被置浄土三部経中、観無量寿経覚、読懸被置半巻計巻御仏左懸絵像普賢其前八軸妙文廿八品副尺被置又右方奉下懸善導和尚御影其前被置九帖御書疏御棚往生要集往生講式其外御心呬呼計浄土発心双紙共引散被置引替空燃物薰不断香煙、

とし、⁽²⁾ ここでも阿弥陀三尊を東向きに安置している様子が見えるのである。しかし、長門本では、

御庵室にたちいらせ給て、一間なる御障子をのぞかせ給へば、昔の蘭麝のにほひを引きかへて、そら薫とにほへる、不断香の煙なり。三尺ばかりの御身泥の来迎の三尊、東向におはします。仏の左には普賢の絵像をかけ奉り、机には浄土の三部経、毎日の御所作とおぼしくて、あそばさして、半巻ばかりにまかれたり。傍らなる御棚には、浄土の御書どもをかれたり。

となつて⁽³⁾ いる。ここでも同様に来迎三尊を東向きに安置していることが書かれている。最後に、源平盛衰記では、

叡覧あれば、昔の空薫に引替て、香の煙ぞ匂たる。僅に方丈なる御庵室を、一間は佛所に修て、身泥佛の三尺の弥陀の三尊、東向に被レ立たり。来迎の儀式と覚えたり。中尊の御手には五色の糸をかけ、御前机に浄土の三部経を被レ置ける。

とあり、⁽⁴⁾ 延慶本、長門本では来迎三尊であつた表記が源平盛衰記では弥陀と表記されているという違いはあるものの、やはり像を東向きに安置している。

「読み本系統」では源平盛衰記では他の諸本が「来迎の三尊」であるのに対し、「弥陀」とするがそれ以外は共通して像を東向きに安置

していることがわかる。

では「語り本」はどうであろうか。

二節 語り本系統

ここでは語り本のなかでも最古態であるとされる「屋代本」と覚一
検校が語り、それを書写したとされる「覚一本」の二本を用いる。で
はまずは屋代本では、

御障子ヲ開ケテ御覧スレハ・来迎・三尊東向ニ御坐ス・中尊ノ御
手ニハ・五色ノ糸ヲ被懸・タリ・普賢ノ絵像・善道和尚ノ御影ナ
ントモ坐シケリ・御前ノ机ニハ・八軸ノ妙文・九帖御袈裟ヲ被置
タリ・都テ・諸経ノ要文共・色紙ニ書ヒテ・所々ニ被押タリ

となっており、来迎三尊を東向きに安置している。しかし、覚一本で
は、

御庵室にいらせ給ひて、障子を引きあけて御覧すれば、一間には
来迎の三尊おはします。中尊の御手には五色の糸をかけられたり。
左には普賢の画像、右には善導和尚并に先帝の御影をかけ、八軸
の妙文、九帖の御書もおかれたり。蘭麝の匂に引きかへて、香の
煙ぞ立のぼる。

となっており、覚一本は向きの表記がされていない。仏像は来迎三尊

を安置していることは屋代本と共通である。屋代本と覚一本の相違と
して、覚一本は向きの表記がされていないことが挙げられる。

三節 仏像の安置の諸本間での相違

このように『平家物語』での庵室の描写における像の安置の向きに
ついて比較すると仏像は来迎三尊を用いていることは共通しているが、
覚一本のみ方角の記載が見えない。では実際、『平家物語』成立とさ
れる鎌倉時代にはどのような設像がなされていたのか。それを見てい
く。

第二章 西から東を向く阿弥陀像

一節 「来迎」と「引接」から見る方角

『平家物語』の諸本では覚一本以外の諸本が阿弥陀像を「東向き」
に安置したとしている。しかし、覚一本だけはこの記述がないのは何
故であろうか。この阿弥陀仏の向きには「来迎」と「引接」の違いが
関係していると思われる。ところで、覚一本の阿弥陀像はどちらの方
向を向いていたのであろうか。

一般に「来迎」と「引接」という語はセットで「来迎引接」と用い
られることが多い。「来迎」とは阿弥陀が臨終者のもとに来て迎える
事であり、「引接」とは阿弥陀や菩薩が臨終者を浄土へ導くことであ
り、文字通り、臨終者を阿弥陀が引いていくことである。阿弥陀が臨
終者のもとへ来て、引いて浄土に迎えるという一連の流れがセットと
なり、「来迎引接」と呼ばれるのである。この語は『日本往生極楽記』

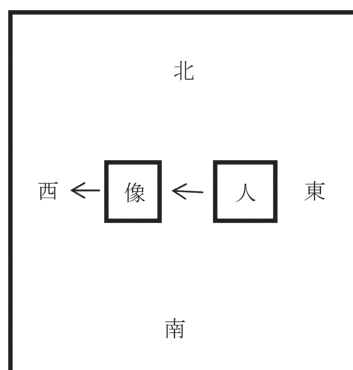
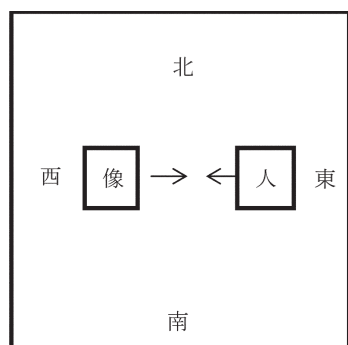
や『梁塵秘抄』、『平家物語』に見える。^⑦しかし、セットで用いられることのあるこの二つの語は阿弥陀が「来る」と臨終者を「引く」ことの別々の意味の語であり、厳密に使い分ける必要がある。これは真義真言宗の開祖である覚鑊の著作である『一期大要秘密集』の中で厳密に区別されている。それを示すと、

『探玄記』に云く、「西国の法に依らば、命捨ててんと欲う者有れば、面を西に向けて臥せしめて前に於て一の立仏の像を安じ、また面を西に向わしむ。一の幡の頭を以て像の手の指に掛けて病人をして手に幡の脚を捉らしむ」と。

今は東に向けて手に五色を掛けよ。西に向くは引接なり、東に向くは来迎なり。東に向い西に向う、又人意に任せよ。年来の本尊、何れの諸仏菩薩なりとも、若しは幡、若しは絲、像の手の指に掛けて、香を焼いて断ぜざれよ。

となる。^⑧ここでいう『探玄記』は『華嚴經探玄記』のことであり、唐の法蔵の作である。『一期大要秘密集』は『華嚴經探玄記』を忠実に引用している。問題はその引用の後の部分で、ここでは像の向きが西なら来迎、東なら引接であると、像の向きによって来迎と引接を区別している。臨終しようとするものが西に向くことは、釈迦が涅槃の時、頭を北にし、顔を西に向けて臥したことからきており、これは往生伝にも記載され、多くの往生者が行った儀礼である。顔を西に向けた者の前に像を置くというのはつまり、像は西に置かれているということ

である。これは『阿弥陀經』に「從是西方過十萬億仏土有世界名曰極樂」とあり、浄土が西方にあるという考えによるものである。今、「来迎」と「引接」の向きについて図示すると以下の通りである。



この図の矢印は目線を表し、「像」は仏像、「人」は臨終する者を表す。【図一】は来迎であり、【図二】は引接の場合の図である。このように見ると「来迎」の場合は像と人は向かい合った状態になり、「引接」の場合は像の後ろに人がいる状況になることがわかる。今現在、我々が像を安置しようとする場合、その向きは拝む者と対面にすることが一般的であろう。しかし、仏教書を見ると、阿弥陀を後ろ向きに安置した例が見られる。この阿弥陀の後ろに従うという意識は鎮西の『浄土要集』にも見え、

観音左立給勢至右立給阿弥陀仏最中 立給 思可教然者観

音蓮台ニノリテ阿弥陀仏後淨土參思南無阿弥陀仏申云

と淨土に向かう際、阿弥陀の後ろに従うことが書かれている。だが、このような意識があったとしても実際の設像において、後ろ向きに像を安置することがあったのであろうか。さらに、この向きの違いはどのようにして起こったのであろうか。まずは臨終行儀について書かれた書物から像の向きについて辿ってみたい。

二節 中国での阿弥陀仏像の方角

臨終の際の別時道場について初めて明確に規定したものは道宣の『四分律行事鈔』であろう。この書は僧伽における個人規則や集団的行事の作法を明らかにした書である。ここでは病者を無常堂に安置することが書かれており、その堂の中に仏像を安置したことが書かれている。その六卷瞻病篇では、

若し中國の本傳に依るに、云はく、祇桓の西北の角、日光の沒處を無常院と爲し、若し病者あらば安置して中に在くなり。凡そ貪染を生じ、本房内の衣鉢衆具せるを見て、多く戀著を生じ心に厭背なきを以ての故に、制して別處に至らしむ。堂を無常と號し、來る者極めて多きも還反せんものは一二のみ。事に即して而し求めては専心に法えお念ず。其の堂中に一の立像を置へ、金薄もて之を塗り、面を西方に向はしむ。其の像の右手を舉げ、左手の中に一の五綵の幡脚垂れて地に曳けるを繫け、當に病者を安ずるに

像の後に在き、左手に幡脚を執り、佛に従うて淨刹に往くの意を作さしむべく、瞻病者は焼香散華して病者を莊嚴し、乃至、若し糞尿吐唾あらば有るに随うて之を除かに罪あることなし。

とし、「中国本伝」を引き、堂には像を西向きに置くことが書かれている。像の安置された方角についての記述がないことは、佐藤成順氏が「中国仏教における臨終にまつわる行儀」で、『四分律行事鈔』が完成した頃はまだ善導が淨土教を宣教していなかったとし、そのために方角を西壁と特定していないと指摘している⁽¹³⁾。しかし、後述するが源信の『往生要集』においてはこの方角を西壁と受け取っていることがわかる。次は善導の『観念法門』について見る。ここでは、

欲^{スル}入^ニ三昧道場^ニ時。一依^ル佛教方法^ニ。先^ラツ須^レ料^リ理^ス道場^ヲ安置^{シテ}尊像^ヲ。香湯^ヲ掃^ス麗^ス。若無^シ佛堂^ニ。有^{ラバ}淨房^ニ亦得^{タリ}。掃麗^{スル}如^レ法^ヲ。取^{リテ}佛^ノ像^ヲ西壁^ニ安置^ス。

とし、念仏三昧の道場として、像の方角は書かれていないが、阿弥陀を西壁に安置することが書かれている。これは明らかに淨土教の西方淨土の意識で書かれていることがわかる。

六六八年の成立とされる道世の『法苑珠林』では、

依^{リテ}西域祇桓寺^ハ云^フ。寺^ノ西北角日光沒所^ヲ爲^ス無常院^ト。若有^シ病者^ニ安置^{シテ}在^レ中^ニ。堂号^シ無常^ト。多生^ク厭背^ス。去^ル者極^メ衆^シ。還^ル唯一^ニ。其

堂内安^ニ立像金色塗^ニ者。面向^ニ東方^ニ。当^ニ置病人在^ニ像前座^ニ。若無^キ力者。令^メ病人在^ニ臥面向^ニ西方^ニ。觀佛好相。其像手中繫^ニ五色綵幡^ニ。令^メ病人手執^ニ幡脚^ニ。作^ニ往生淨土之意^ニ。

（中略）

或^{ハル}作^ニ彌陀彌勒阿閼觀音等形^ニ。如^シ前安置^ニ。燒香散華^ス。

とするように、『西域祇桓寺図』を引用しながら、道場の中の設像について述べている。この『西域祇桓寺図』は道宣の『中天竺舎衛国祇桓寺図経』と考えられるが、その中には無常院についての記述は見えるが、設像については書かれていない。¹⁶道世は『中天竺舎衛国祇桓寺図経』を参考にしながら、設像については『四分律行事鈔』に依ったのか、もしくは『西域祇桓寺図』なるものが存在し、その引用であるのかは判然としない。『四分律行事鈔』が西向きであることに對し、『法苑珠林』が東向きであることに關して、佐藤成順氏は、

「面向西方」と「面向東方」との違いはその背景にある思想の相違に由来するのである。道宣は必ずしも西方淨土と阿彌陀を予想していたとは思えない。また、『行事鈔』では、単に「淨刹に往く意」となっているが、『法苑珠林』では「往生淨土之意」と明確な淨土教の表現に変わっている。

¹⁷とする。中国において西向きと東向きの違いは淨土教の影響であるとされるが、仙海義之氏は、唐の不空の『無量寿如来觀行供養儀軌』に

おいて、壇の西面に無量寿像を安置し、持誦者は壇の東に座を向け、面を西に向け、対像して座することがあることを指摘する。そこから、

先に、善導等に因り、阿彌陀持淨土信仰が鼓吹されるに連れ、臨終行儀の必要性が認識される様になったとしたが、むしろ、觀想念仏を、その本とする所説からは、念仏三昧法の修行方法が先んじて確立されていたと見るのが当然であろう。念仏三昧道場の設像方法は、尊像を東向きさせるものであった。臨終行儀に於ける設像方法の内にもまた、念仏三昧法に於ける設像方法から影響を受けたものがあつたであろう。

¹⁸とし、東向きの起源を念仏三昧道場の設像方法に求める。私は像の「東向き」は淨土信仰の広がりとは念仏三昧道場の実際の設像方法との双方影響から来ているのではないかと考える。理論としての西方淨土と實際の念仏の際の方法とが混ざり合つた結果このような表記が生まれたと考えられるのである。そうした問題が日本においては「来迎」と「引接」の問題に変化してくる。それはこれまで先行研究では西向きから東向きへの移行を『法苑珠林』に求めていた。だが、この東向きの記述は迦才の『淨土論』にも見えるのである。該当箇所を示すと、

三者須^ラ三^ラ專念^ラ阿彌陀佛名號^ヲ。須^ラ別^シ莊嚴^ニ道場^ヲ。燒香散花幡燈具足。請^ク阿彌陀佛^ヲ。安^メ道場内^ニ。像面向^ニ東^ニ。人面向^ニ西^ニ。

となる。¹⁹ ここで安置された方角については書かれてはいないが、浄土教の影響から西壁に安置されたことが予想される。工藤量導氏は著『迦才『浄土論』と中国仏教―凡夫化土往生説の思想形成―』で『浄土論』の成立は『法苑珠林』よりも先であると指摘し、さらには長安の弘法寺に迦才と道世が住寺していたことを指摘している。²⁰ その中で工藤氏は道世が『浄土論』を見た可能性も考えられるとする。この説によると像の「東向き」の初出は『浄土論』である可能性が指摘されよう。

ここまで中国では『四分律行事鈔』で西向きと書かれたものが、『浄土論』ないし、『法苑珠林』において東向きに変化したことを述べた。では日本ではどのように享受されたのであろうか。

一節 日本での阿弥陀仏の方角

日本では源信によつて書かれた『往生要集』が臨終行儀の日本における普及の発端であろう。『往生要集』では、

四分律鈔瞻病送終篇引ニ中國本傳ニ云、祇桓、西北角。日光沒處爲ニ無常院。若有ニ病者ニ安置、在中。以下凡生ニ貪染。見ニ本房内、衣鉢衆具。多生ニ戀著無心厭背。故。制令ニ至ニ別處ニ堂。號ニ無常ト來者極多還反。即事ニ而求。專心念法。其堂中置ニ一立像。金薄塗之。面向ニ西方。其像右手舉。左手、中繫ニ一五綵幡。脚垂曳地。當安ニ病者ニ在ニ像之後。左手執ニ幡脚。作下從佛往ニ佛淨刹ニ之意。瞻病者焼香散華莊嚴ニ病者。乃至若有ニ尿尿吐唾。隨レ

有除レ之。或說佛像向ニ東。病者在ニ前。

とし、まずは『四分律行事鈔』を引用して、西向きとしながらも東向きにする或説を紹介する。『浄土論』には病者を前に置くという記述がないので、この「或説」は『法苑珠林』であろうと考えられる。ここでは像の向きについて二つの方法があったことが示される。同じ源信の手による『横川首楞嚴院二十五三昧式』では、

立一字草菴安置彌陀如來。將爲ニ一結終焉之處。可成ニ三愛不起之謀。方隅縱塞日時牢凶。皆移ニ此院共養ニ彼人。又如論云。佛像向ニ西方。病人亦從レ後。佛像右手、中繫五色之幡。授ニ病者左手。將令レ執幡脚。當令レ成ニ從佛往生之思。凡焼香散常莊嚴病者。

とされており、ここでは西方に向けるとする。『一期大要秘密集』や『臨終行儀注記』でも『往生要集』と同じく西向き、東向きの表記が見えるが、この理由を『一期大要秘密集』は「来迎」と「引接」の違いに求めている。「来迎」の場合、臨終者を阿弥陀は迎えに来るわけであるため、顔は東を向く。対して、「引接」の場合は臨終者を引いていくために、阿弥陀は浄土へ帰る形として顔は西を向くのである。ではこの時代において実際、阿弥陀はどちらの方向へ向いていたのであろうか。おそらく、多くは東を向き、臨終者は像の顔を見るところを取ったのであろう。それは、法然亡き後の寛喜年間に撰述された

聖光の『念仏名義集』に、

臨終行儀申懸幡燃火焼吉名香本尊向東懸進^{トスハヲキキメイヲニケラセ}

とあることから見て取れよう。⁽²³⁾しかし、西向きに、つまりは像の後ろに臨終者がいたであろう例が日本にある。

『後拾遺往生伝』では、源親元が迎接の堂を建て、その阿弥陀像を安置したとし、そこには「其の仏前は西に向く」とある。⁽²⁴⁾ここには長治二年に往生したことが書かれていることから実際、この当時に西向きに像を安置した例となる。実際の作例として、西向き、臨終者から見て後ろ向きに像を安置していたであろう例として、禅林寺の「みかえり阿弥陀」がある。

みかえり阿弥陀とは、京都の禅林寺の本尊である。東大寺の別当であつた永観律師が禅林寺に帰った折に東大寺からもたらしたものであるといわれる。ある時、永観が念仏行道している時に、阿弥陀像が須弥壇から降りて、永観を先導した。そして、それを見て立ち止まった永観を阿弥陀が振り返り、「永観おそし」と呼んだという逸話が残っている。

米屋優氏は、

すなわち、西向きに安置した来迎印の阿弥陀立像の後ろに、臨終の病者を北枕で西向きに寝かせ、病者を阿弥陀の持つ幡にすがらせて、西方浄土に引かれていくという安らぎの気持ちを持たせる

作法が、源信の時代には伝えられており、永観もそれに倣ったことが知られている。往生者は阿弥陀如来の後ろ姿を見ながら極楽往生を確信して永い眠りにつくことになる。

いよいよ西方浄土に旅立つというとき、阿弥陀如来が慈悲を意味する左に振り返り、慈しみに満ちたまなごしを投げかけたならば、往生の確信はより確固たるものになるだろう。

とし、このみかえりの意味を阿弥陀が往生する者を振り返っているとしている。これは「引接」の意味から考えた場合、適当な解釈であろう。さらに、光森正士氏も、

憶に禅林寺の本尊も実はこのような還り来迎図に見られる阿弥陀仏が木彫化され、造像せられたものではなからうか、すなわち如来が往生人を振り返り見守りながら浄土まで還向される姿を造顕したものであり、それはまた汝等衆生を化導して必ず浄土に連れ還るぞという姿であり、これを礼拝する衆生をして踊躍歓喜の念を起さしめ、深信に能入せしめる意図をもって造像せられたものであろう。

としている。⁽²⁶⁾ここには後ろ向きに像を安置した旨は書かれてはいないが、「還る」とは浄土に阿弥陀が臨終者を連れ帰ることであり、それから考えるとやはり、像は後ろ向きに安置されていたのであろう。しかし、この像は現在、前向きに安置されている。この点については、

五十嵐隆明氏が、

わたしが注目したいのは、みかえり阿弥陀如来像の安置された場所である。現在の本堂に元から安置されていたかどうかはわかっていない。だが、本堂から西に向かつて眺望が開け、夕日が西山に沈むのを見ることのできる位置にある。

とし、堂の建て方から考えた場合、西側に置かれていたであろうことを推論している。

そして、この像が歩行の形式をとっていることも注目される。²⁸歩き、振り返るという形式からこの像がやはり、往生者を振り返る作例であることが確認でき、像を後ろ向きに安置したであろうことが考えられる。永観の逸話が前に歩きながら、振り返ったことも注目すべきことであろう。

さらに注目したいのは、「見返り阿弥陀」が安置されている禅林寺に証空が住寺していたということである。証空はこの「見返り阿弥陀」を知っていたわけである。前述した通り、「見返り阿弥陀」が「西向き」に安置されていたとするならば、証空やその門下の中で像が「西向き」に安置されたことがあったであろう。このように考えると、覚一本が像の方角を明記しないことに、西山派の影響が考えられるのである。

こうして、像の向きはまず西向きとされていたのが、東向きに変化し、日本ではこれが「来迎」と「引接」の違いによる向きの変化とな

った。そして、日本での実際の西向きの例として、往生伝、みかえり阿弥陀について述べた。このように見ていくと『平家物語』の覚一本の阿弥陀三尊の向きは東向きではなく、西向きの可能性があることが指摘できるのである。

『平家物語』灌頂巻と浄土宗西山派の関係は福井康順氏が初めて指摘している。ここからは少し灌頂巻と西山派との関係について見てみたい。

四章 『平家物語』と浄土宗西山派の関係

一節 先行研究による指摘

前述したが、『平家物語』灌頂巻と西山派との関係について最初に指摘したものは、福井氏の「平家物語『灌頂巻』の佛教史的性格」であろう。ここでは、釈迦と阿弥陀を共に合して拝む二尊一致の信仰に注目している。西山派は天台の釈迦信仰をその教義に取り込んでおり、福井氏は、

今、重ねてその要点についていうならば、「左に普賢の画像、右には善導和尚並に先帝の御影」がまつられている意義がそれであって、長門本の「平家」には、行文に多少の違いがあるが、特に問題の中心は、ここに「善導和尚」の出ていることである。けだし、法然が、その主著である選択本願念仏集において「偏依善導」と称して、人も知る唐の光明寺善導に依存していることは、

ここに今更いうまでもない信仰で、法然もまた現に「善導の化身」である、ともされているのであって、平家物語では「戒文」に、この善導の観経疏や般舟讃の引かれていることが注意される。

（中略）

ここに問題は、しかも彼が、人も知るように早くから慈円と深い交渉があり、西山の往生院に住して天台の密教を熱心に勤修していたことである。寛喜二年、その多寶塔の落成や、中央には佛眼曼荼羅を掛け、前には天台大師と善導和尚の良蔵を安置し、千僧を供養していることであって、

とし、建礼門院の庵室に飾られた「左に普賢の画像、右には善導和尚並に先帝の御影」に注目し、法然淨土教の善導への信仰と天台の普賢への信仰が見えることは西山派の証空が慈円から天台の密教を学んだことが理由とし、『平家物語』と西山派を関連づけている。²⁹さらに、瓜生等勝氏も「平家物語」灌頂卷の仏教史的考察のなかで、

しかるに、建礼門院の入寂の年次は一二一三年であるから、大原御庵室の来迎の三尊の前には『長門本』の如く「淨土の御書」は置かれても、「八帖の御書」は置かれても「九帖の御書」が置かれたとすることはできない。おかれることのできない「九帖の御書」が置かれたとする覚一本灌頂卷の記述をどのように理解したらよいであろうか。

それについて、善導の著作は古来五部九巻と称してきたので

あるから、一巻不足しようがしまいが、いわゆる「九帖の御書」とするのは早計ではなからうか。特に『般舟讃』の発見年次が一二一七年という『平家物語』成立と相前後する時期であつた点から考えてみて『平家』の作者が始めからあえて「九帖」としたとは考えられない。すくなくとも一二一七年以降この語が記入されたとすべきであろう。わたくしは思う。この「八帖の御書」であつたものをあえて「九帖の御書」としたことについては『般舟讃』発見者である証空（西山派の祖）を無視して考えることは許されないことではなからうか。

とし、庵室の中に置かれた「九帖の御書」に注目する。九帖の御書とは善導の著書である、『観経疏』四巻、『法事讃』二巻、『観念法門』一卷、『往生礼贊』一卷、『般舟讃』一卷の五部九巻のことである。注目すべきは瓜生氏も指摘するように、『般舟讃』の発見者が証空という点である。

二節 証空と『般舟讃』

そのことは、『西山上人縁起』には、

建保五年のころ仁和寺の経蔵虫弘の時分に、上人かの辺をすぎ給ふことあり。立ちよりて少々聖経を披見し給ふほどに般舟讃三昧行道往生讃と銘かきたる巻き物のあり。往生讃の詞にきもつきて、内題をひらき給ふに撰号を善導とぞ注しける。寄特の思をなして、

後日に御室よりかの本を申しうけて委しく披見し給ふに、先祖相伝の義理文証はなはた分明なり。

と見える。『本朝高僧伝』の「城州三鉢寺沙門証空伝」にも

建保五年遊_ニ仁和寺。時見_ニ衆僧涼_ニ曬蔵函。縹囊細帙。殿上紛羅。其中表題_ニ般舟三昧行道往生讃。開_レ帙閱_レ之。善導讃也。

と見え、建保五年に証空が仁和寺で『般舟讃』を発見したことが書かれている。したがって、建礼門院出家の際には、『般舟讃』は発見されておらず、『平家物語』で「九帖の御書」とするのは不自然であるという瓜生氏の指摘はもつともである。このように先行研究の指摘から『平家物語』灌頂巻と浄土宗西山派との関係が考えられる。そのことを考えると灌頂巻における阿弥陀像の設像に西山派が関与していた可能性が指摘できるのではないか。

おわりに

本稿では『平家物語』の庵室に安置された阿弥陀像の「方角」を鎌倉時代の阿弥陀の設像から見てきた。そして、『平家物語』において安置された阿弥陀仏像は覚一本においては像の向きは「西向き」である可能性を指摘した。その中で、像の「西向き」の安置に西山派が関係する可能性がある。このように庵室に安置された阿弥陀仏像を見ていくと、その中に『平家物語』と西山派との関係が見出される。先行

研究が指摘するように「戒文」に見られる『般舟讃』の引用からも西山派との関係が見られることも興味深い。さらに『平家物語』灌頂巻の設像において「立像」「三尺」という表記も諸本間で相違がある。今後はこの二つの表記の意図についても鎌倉時代の設像から考えていきたい。

〔注〕

- (1) 『平家物語』延慶本 長門本 対照本文（勉誠社 平成二三年）
- (2) 『四部合戦状本 平家物語』下（慶應義塾大学付属研究所所道文庫 昭和四二年）
- (3) 注（1）前掲書
- (4) 『有朋堂文庫 源平盛衰記』下（有朋堂書店 昭和二年）
- (5) 『屋代本平家物語』下巻（桜楓社 昭和十八年）
- (6) 『平家物語二』日本古典文学全集30（小学館 昭和五〇年）
- (7) 注（6）前掲書
- (8) 卷第三「灯籠之沙汰」のなかに「来迎引摂」という語が見える。
- (9) 『興教大師全集』下（世相軒 昭和十年）
- (10) 『大正新脩大蔵経』第12巻
- (11) 『大正新脩大蔵経』第12巻
- (12) 神居文彰、田宮仁、長谷川匡俊、藤腹明子『臨終行儀―日本的ターミナル・ケアの原点』（北辰堂 平成三年）
- (13) 『国訳一切経』和漢撰述部 律疏部二（大東出版 昭和一三年初版 昭和五四年改訂）
- (14) 藤善眞澄『道宣伝の研究』（京都大学学術出版会 平成一四年）
- (15) 第十一章に詳しいが、ここでいう中国本伝を藤善氏は靈裕の『聖迹記』もしくは靈裕の引く『中国本伝』を指すものであろうことを指摘している。
- (16) 佐藤成順『中国仏教における臨終にまつわる行儀』（『浄土宗典籍研究 研究篇』同朋社 昭和六三年）
- (17) 『大正新脩大蔵経』第47巻

- (15) 『大正新脩大藏經』第53巻
 - (16) 『大正新脩大藏經』第45巻
- 所収の『中天竺舍衛國祇洹寺圖經』の無常堂の記述には以下となっている。訓点は筆者による。
- 大院西巷門西^ノ自^ハ分^ニ二六院^ニ。南^ノ第一院^ハ開^キ於^ニ三門^ニ。西^ノ塞^ク名^ヲ無常院^ト。中^ニ有^リ一^ノ堂^ニ。但^テ以^テ白銀^ヲ。四^ノ面^ヲ白廊^ヲ。白華^ヲ充滿^ス。畫^ニニ^ハ白骨^ノ狀^ト。無^ニ處^ト。不^レ有^リ。諸^ノ欲^ヲ無^レ常^ト。皆^ノ舉^ル至^ニ此^ニ。令^レ見^ル白^ノ骨^ヲ。諸^ノ非^ノ常^ト。相^ノ既^ニ命^ヲ終^シ已^ニ。從^テ南^ノ門^ヲ出^テ。西^ノ大^ノ牆^ヲ之^ノ西^ノ門^ヲ。一^ノ切^ノ無^レ常^ト。皆^ノ由^ル此^ノ路^ヲ。院^ニ有^リ八^ノ鐘^ト。
- これより以下は無常堂に置かれた鐘についての記述がなされ、無常堂に仏像が置かれた記述は見えない。
- (17) 注(13)前掲論文
 - (18) 仙海義之『臨終行儀における設像―来迎図・来迎像の成立及び展開を考察するための一視点として―』（『國華』第一三一八号 朝日新聞社 平成一七年八月）
 - (19) 『大正新脩大藏經』第47巻
訓点は筆者。
 - (20) 工藤量導『迦才『浄土論』と中国仏教―凡夫化土往生説の思想形成―』（法蔵館 平成二五年）
 - (21) 『源信』日本思想体系6（岩波書店 昭和四五年）
訓点は筆者。
 - (22) 『大正新脩大藏經』第84巻
 - (23) 『浄土宗全書 卷第十卷』（山喜房仏書林 昭和四六年）
 - (24) 『往生伝 法華驗記』日本思想体系7（岩波書店 昭和四九年）
 - (25) 米屋優「みかえり阿弥陀と西山禅林寺派に伝わる彫刻」（『京都・永観堂禅林寺の名宝』平成八年）
 - (26) 光森正士「阿弥陀仏の異形像について」（『真宗史の研究』平成八年）
 - (27) 五十嵐隆明「永観律師の念仏信仰と「みかえり阿弥陀」の御開帳」（『京都・永観堂禅林寺の名宝』平成八年）
 - (28) 濱田隆「立像阿弥陀来迎図成立史考―仏坐像から仏立像へ―」（『佛
- (29) 教藝術126』毎日新聞社 昭和五四年）
 - (29) 福井康順「平家物語「灌頂卷」の佛教史的考察」（『干潟博士古稀記念論文集』干潟博士古稀記念論文会 昭和三九年）
 - (30) 中西随功『証空浄土教の研究』（法蔵館 平成十二年）
この書の第一章に詳しい。
 - (31) 瓜生等勝「平家物語」灌頂卷の仏教史的考察―「九帖の御書」「善導和尚の御影」について―」（『国語と国文学』第四十三巻第五号 至文堂 昭和四一年五月）
 - (32) 『国文東方佛教叢書』伝記部上（国文東方佛教叢書刊行会 大正一四年）
 - (33) 『本朝高僧伝』卷第三十四（佛書刊行会 大正二年）
- （さかぐち たくや 文学研究科文学専攻博士後期課程）
（指導教員・黒田 彰 教授）
二〇一六年九月二十九日受理